
いわく付き物件の幽靈

狂風師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いわく付き物件の幽霊

【NNコード】

N4233S

【作者名】

狂風師

【あらすじ】

いわく付き物件に住む主人公。 しかしその家には、幽霊が住み着いていた。 姿の見えない幽霊とロリコン主人公との甘い恋愛生活をどうぞ。 5/22追記 (一応) 完結しました。 あとは作者の執筆意欲があれば続きを書くかもしれません。

1 / 4 追記 クリスマス企画に向けて執筆中です。

出番い（前書き）

この小説を読むにあたっての諸注意。
『細かいことを気にしたら負け犬』

以上！

出会い

「もーいいや！ 寝るー。おやすみ！」

明日提出の課題。けつきて終わらせないまま、俺は眠りこついた。

なるよつになると。それが俺のポリシー。

朝。田舎ましの無機質でイライラする音に起しそれる。机の上のやりかけの……？

見るとそれは、『やりかけ』ではなく『終わつている』。なぜか完成している。

寝ぼけてやつたのか？ いやでも… そんなはずは…。

考えても無駄なので、気にせずに学校に行くことにした。

学校から帰ると、また課題を机の上に置き、やらずに放置。
ちなみにこれも明日提出。

大丈夫！ 今度は友人にノート借りてきたから。写すだけ！

今はのんびりゲームができる。[与]す作業は夜でいいんだよ、夜で。

朝。田覚ましのイライラする音で起きて、俺自身の意志の弱さに、やうじにライライする。

だいたい想像がつくだろう。そり。課題、やつてない。

机の上に無造作に置かれた2つのノート。

己のバカさ加減に呆れる中、軽くめくつてみると…。

「あれ…やつてある…」

不思議なこと、またもやつてある。

いつたい、何が起じたのかサッパリわからない。

だが、やはり考へても考へても結論は出ないため、いつも通りに家を出た。

不思議な出来事の答えが出よつとじていたのは、ちょうどその日の帰り。

俺の住む家は、駅まで4分。大型スーパーまで3分。コンビニまで1分の良物件。

全部、徒歩での時間だ。

それでいて家賃は、こゝら辺の相場の半額以下。

『いわく付き物件』と世間では呼ぶ。

説明はあったのだが、なんだかよく覚えていない。別に安けりやいいし。

幽霊とか、そんな非科学的なもの信じないし。

だがしかし…さすがにな…。今回のことをひつひつといじり説明すれば…。

とかなんとか悩んでいると降りる駅。

あとは暇になつた時にでも考えるとしよう。

さてと、またも課題があるわけだ。当然やるわけがない。
代わりに、『君は幽霊?』と書き、机の上に放り投げた。

俺は何してるんだ…。そう思つても、消すのはめんどくさかつたので、そのままにして眠りこついた。

妙に寝つけない。今あのノートには返事が書かれてこるのでどう

か？

気になつて気になつてしようがない。

朝。目覚ましよりも先に起きた。微妙な優越感に浸りながらも、ノートを確認した。

課題はきちんと終わっている。そして、あの質問には…。

『君は幽霊?』の下に『はい』とだけ書かれていた。

そこで俺はようやく幽霊がいるのだと認識した。

学校に行き、人の話なんか耳に入らず、ただただ家のことを考えていた。

帰宅後、紙とシャーペンを持ってきて机の上に置く。

紙に『君が本当に幽霊なら、今ここで、俺が見てる前で文字を書いて』

そう書いて、シャーペンを置いた。

5分くらいあつただろうか。シャーペンが宙に浮き、文字が書か

れる。

幽靈か何かがいる」と覚悟していたが、さすがにビビる。

書かれた文は

『私は幽靈です。姿は見えません』

文字からして女っぽい文。きれいに整った、しかしどうしたことなく若い感じがする。

『今前はあるの?』

『凛』

筆談は続き、リンちゃんとともにかなり仲良くなつた。

どれくらいこかといつと、「凛」を「リンちゃん」と呼べるへりこじ。』

年齢は一歳。死んだときの年齢だから、そのまま生きていいたら今頃は…。

まあ、少女に年齢を追及するのは野暮つてもらだ。

『じゃあ俺はそろそろ寝るから。おやすみ、リンちゃん

『おやすみなさい。また、お話してくれるといいさうです』

お話を言つても筆談だけ、リンちゃんは話すのは楽しそう。

ただ単に俺が口リコンハていうのもあるけど、生活に新鮮さや刺激が増した感じがする。

「どうからは見えないけど、向こうはどうなんだか。」

ま、いつか。見てても見えてなくとも関係ないし。

朝。目覚ましの音と、何かの痛みで飛び起きる。

頭をさすりながら、床に落ちているものを見ると、昨日使ってたシャーペン。

それも芯が出しつぱなし。

いや、まさかと思つが……。

「コレンちやん?」

机の上で、どこから出してきたのか、ボールペンが宙に浮いていた。

紙を見てみると

『うるめんなさい…』

許すつ！

こんなかわいい子が……って姿は見たことないんだけど……少し震えた文字で謝ってるだ。

俺の頭の中で、ピンク色のイメージが……。

いやいや、俺は朝から何を……。元気になるんじゃない、バカ。

出会い（後書き）

更新ペースは遅くなります。

またたりダラダラ書いていくつもりです。

その代わり、ちゃんと書いていくつもりです。

私の作品はふざけたものばかりなので。

生活（前書き）

ネタがある内はハイスピード更新。
無くなれば、それで終わり。

感想くれると作者が喜び、よりハイスピードになります。
ネタがある内は。

夕方。

学校から帰ると、玄関に置いてあるメモを見つけた。

『朝は『ごめんなさい…』。謝ろうと黙つたんだけど、忙しそうだったのでから…』

思い出せば、今日の朝はやたらと忙しかった。

あの事件の後、友人からメールが入り、朝飯も食べずに学校に向かつた。

その時にリンちゃんが何か言つてた様な氣もする。

「言つてた」というよりも「書いてあつた」の方が正しい。

机の上に紙が置いてあつたような氣もある。

今になつてそのことに気が付き、急いで机の上を見た。

しかし、そこに紙は置いてなく、きれいさっぱり何もなかつた。

罪悪感と後悔から、俺は紙を探し続けた。

結果から言つと、それは簡単に見つかった。ゴミ箱の中に丸めて捨ててあつたから。

『『『めんななやー…。まだ痛みますか…?』』』

読んだ瞬間に涙があふれ出た。

少女にて心を離れむことを、しかもそれを無視するなんて。俺は最低の男だ。

「コンちゃん… 僕の方…めん… 朝、気が付いてあざられなくて」

机のそばに立って、呟いた。すると、ゆっくりとシャーペンが動き出した。

コンちゃんはすぐ近くにいる。姿は見えないが、俺には分かる。

めつとひだ。今、俺はコンちゃんの後ろに立つてゐます。

触れないコンちゃんを強く抱きしめてあげる。悪いのは俺なのだから。

『私が悪いの…めんなやー…』

それを見て、さらに強く優しく抱きしめてあげる。

耳元… であひつといひ、やつと囁いた。

するとまたシャーペンが動き出し、紙に文字が現れる。

『私…あなたの反対側ですか…』

…。

あ、ああ、わかつてゐた。わ、わざとに決まつてゐるぢやないか。
ははは…。

すぐわま反対側に回つ、わつわと回じよつて抱きしめて頭を撫で
てあげる。

「もし…もし俺の靈感が強かつたら、つんひゃんを見ぬ」ことが出来
たのかな?」
いののかどうかなんてわからな。でも、それでいいぢやないか。

何気なく漏れた本音。

『私は…今のままが良いと思こます

「どうして?」

『…わかりません。…』めんなわ…』

「いや、謝りなくしてこよ

学校から帰つた服装のまま時は過ぎて、気が付いたらお月様が空を
照らしていた。

晩飯を買いに行くべく、再び靴を履こうとした。

残念ながら俺は料理なんてものには縁がなく、調理実習では「邪魔をしないことが仕事」と言われたほど。

俺が料理をすると、なぜか焦げる。それに色が紫やスカイブルーになる。

そんなわけで、晩飯は食べに行くか弁当を買うか。それしか選択肢がない。

で、買いに行くために靴を履きたいのだが…。

「リンちゃん？ その靴を返してくれないかな？」

いつの間にか玄関に向かつたリンちゃんは、俺の靴を持って離れていく。

そして靴が落ちた場所は、玄関から一番離れた場所。

つまり…行くな、と？

いや待て、これはリンちゃんからのメッセージじゃないか？

例えば…

「ずっと私の傍にいて」とか「今日までここも行かせないでっ」とか。

おつと、これ以上はイケナイ領域の妄想が…。

「えつと… 晩御飯を買いに行きたいんだけど…」

今度はシャーペンが宙に浮き、文字が書かれる。

『私が晩御飯を作つたら… 迷惑でしょうか?』

… これは意外だつた。そつちの方向もあつたか!

リンちゃんの手料理か。悪くない… いや、非常に良い。

幽靈とはいえ、13歳の少女の手料理とか… 僕だけこんなに幸せ者でいいのだらうか!

「ぜんぜん迷惑じやないよ。作つてくれるなら、お願ひしようかな

『はい。』

しばらくすると、いい匂いが部屋を満たしてくれる。

勝手に裸エプロンで料理をしてくれるリンちゃんの姿を妄想して、俺のニーがアレなことに…。

包丁が宙に浮く光景は、ホラー映画に出できそうな感じだったが。

運ばれてきた料理を見ると、とてもおいしそうなオムライス。

：相手は少女なんだし、やんわり優しく言おう。

味が濃い！

決して不味いわけじゃない。俺だって濃いめの味付けは大好きだ。

だけど、これは「濃い」の範囲を超えている。

むしろ辛い。辛いを通り越して痛い。

のどの水分が全部蒸発しそうなくらい痛い。

紙には

『どうかな…？ おいしいですか？』

…。

「…と、とってもおいしいよ。でも、ちょっと味が濃いかな？」

『す、すいません…。私…味見ができなくて…』

…許すしかないだろ。

俺がリンちゃんに怒れるわけがない。

「でも、コンちゃんが一生懸命作ってくれて嬉しく……。」

「でも、コンちゃんが一生懸命作ってくれて嬉しく……。」

明日は休みだし、腹痛になつても大丈夫だろ？。

もうすぐで腹調子に違和感を覚えてこるが……。

……やうこえは、俺が寝てゐるからコンちゃんが寝てゐるのだから……。

これまだひとつ氣にじくなかったが、幽靈も見るのだから？

『氣になつて、小声でコンちゃんを呼んでみた。

』『え？

……こんんだ。やぐらが返つてきただとこいつは、俺のすぐ近くにいたのか。

「いつも俺が寝てゐるとき、コンちゃんが寝てゐるの……。」

『私は寝れないの、ずっとここにまわよ

「ついつい」とつむき合ひの俺の寝顔を見つめていた……。

『わたくし迷惑ですか』

「ここ、そんなことほんこよ。リンちゃんがやつしたことない、止める、なんて言わないよ」

内心、変な寝言ひてないか、激しく心配だつたがどうせやつせない。

「Oと聞えない人間なんだよ、俺は。

それに、リンちゃんに見られながら寝てると困つて……さ、なんでもない。

「ねやみ、リンちゃん

『おやすみなさい』

生活（後書き）

予定としては5話か6話で完結。
欲を言えば、ずっと続けたい。

口っこは書いて楽しいです、はい。

休日（前書き）

はい。また更新。そしてネタが尽きちゃつ。

休日

土曜日。

まぶしい朝日と、きれいな青空が垣間見える。

「…朝日は、朝寝に限る。何もしないでグダグダ過ごすのが最高。」

頭までスッポリと布団をかぶり、おやすみなさい。

「…リーンちゃん、布団…返して」

窓とカーテンは開け放たれ、布団は俺からどんどん逃げていく。

細い目で時計を見ると、10時半。

…なんだ。まだ今日は始まつたばかりじゃないか…。

頭上にはメモ帳が浮かんでいた。

『朝ですよ。起きてください』

いや、まだ朝じゃない。まだアレだから。あの、朝の前だから。

しぶしぶベッドから降りて、特に何をすることもなく、普段着に着替えた。

今日は天気も良いし、散歩をすることに決める。

「アヒト家の中で『アロアロ』などって出来る。」

「コンちゃん、この家のから出られるの？」

『無理…だと想います』

地縛霊。その土地に未練があり、そこから離れられない霊のこと。
つまづコンちゃんには、何か未練がある。何かやり残したことがある。…はず。

ヒルヒルも、それは俺に手伝えることなのか?

「何か、あるんだね？」

返事はない。

「まあ、無理に言えななんて言わなによ。コンちゃんの好きにしたらここだ」

今重要なのは、この暇な一日をどう過ごすかである。

しかし、外に出れないとなると…せめ事がだいぶ限られてくれる。

家にある遊び道具と並んだら、トランプくらいしかない。

さて、並んだものか…。

そう考へてゐると、携帯の着信音。

また友人から。内容は、「遊びに行こう」

あいつはホントに暇人だな。バカなくらいに。

けれど、俺にはリンちゃんというかわいい少女がいるわけで。

どっちを取るかと言えば…。

『私は大丈夫です。どうぞ、『友人と遊んできてください』

こんな紙が目の前に現れた。

すぐに友人に返事を返す。内容は、「誰が行くか、クソ暇人」

たぶんリンちゃんは驚いているだろう。

こんな少女を家に置いて、遊びになんか行けるか。

今日は家でのんびり過ごすと決めた。

が、やはりする」とはない訳で…。

テレビを見ながら、何をするわけでもない。

ダラダラと時間は過ぎてこゝき、気付けばもう晩飯。

まったく、時間が過ぎるのは早い。何かをした記憶もなく、今日一日が無くなつたような感じ。

晩御飯は昨日と同じ、リンちゃんの手料理。

前回みたいな痛い料理ではなく、味見できない事を考慮すると、かなりウマい。

休みの日なんてこんなもんだろ。

日曜日。

天気は打つて変わって大雨。

昨日寝るときから、なんとなく雨音は聞こえていたが、まさかこんなに降るとは。

だが、今日は家から出なければならぬ。

行かなければ、飢え死にだ。

日曜特売。これが目的。

今まで弁当だった生活の俺には、手料理は嬉しい。

しかし同時に、冷蔵庫の中身が寂しくなっていった。

特売を逃せば、一人暮らしの身にとって大ダメージとなる。

リンちゃんには悪いが、これだけは出陣しなければならない。例え大雨の中でもだ。

きちんと声をかけ、理解してもらつた上で出発する。

空から降る大量の液体の槍、地面には水たまりという地雷。

スーパーに着けば、そこはまるで戦場。

しかし！ 僕は負けるわけにはいかない。リンちゃんの手料理を食べるためだ！

戦場を離脱し、買い物終了。

戦果は上々。なかなかに良い品物が格安で手に入った。

これならしばらくは手料理で安定だ。

家に帰ろうとしたとき、傘立てを見た。

…俺はさうやつて大雨の中、ほとんど濡れずここまで来たのだ
わい。

傘も差さず」ここまで来たっていつのか？

「ふつぎけんな… 誰だ俺の傘を盗んだ奴は…」

周りの主婦たちが一斉に一いつ朶を見る。

言つてから顔を赤くする。 もつ遅い。

わいつか、ざいつかって帰るつか…。 未だ大雨だぞ、おい。

傘を置く？

イエス。 それしかないだろ…。

傘を置つて、帰るうとするが、昨日のメールの張本人が現れた。

当然のように絡まれる訳で、物凄いやる気のなさで適当な嘘を言
い…

「で、何でいつもなるの？」

友人の家へと同じ招待されてしまった。N〇と言えない人間。

家には帰りを待つてゐるリンちゃんがいるのに…。

そんな事を思いつつも、ついついぐだらない話に花が咲く。

帰るころには雨は静まり、小雨程度。

急いで家に帰り、小声でリンちゃんを別の部屋に連れて行き、説明をする。

わかつてくれたかくれないのか、曖昧な返事が返ってくる。

『仕方ない……ですよね……』

絶対落ち込んでるよ。どうせつか……。全責任は俺にあるわけで……。

「へー、なかなか良い家じやん」

まさか、友人が俺の家に上り込んでくる展開になるとま。

NOと言えない人間……。俺の馬鹿……。

呼んでもしまったものは仕方ない。

リンちゃんには俺の寝室に隠れているよう言つておいた。

とりあえず、何も起こらない事が第一。

さつさと友人を追い帰したいが、根が生えたように動かない。

そのうが、もっと呼ぼうぜ、というバカを言いだした。

さすがに腹が立つた。友人の靴を外に投げ、親切にも傘も同じところに投げてあげた。

「もう大丈夫だよ、リンちゃん」

寝室の扉を開けて呼んでみると、俺の布団が不自然に盛り上がりしている。

恐るべやここにいるのだろう。

布団をめぐることなく、隣に座つて優しく話しかけた。

しばらく布団は動かなかつたが、そのうち元盛り上がりは消えた。

ベッドから降りて行つたのだろう。

「リンちゃん? ピン?」

立ち上がって居間に戻ると、紙がこぢりへやつて来る。

『ずっと…一緒にいたいです』

休日（後書き）

「少女にこんな事をされたら死んでも良い！」
そんなネタを大募集です。
口りコンさんよ、集え！

作者のやれる限りがんばります。

幽霊責め（前書き）

回避推奨。激しく回避推奨。何も言わず引き返すことなく、強くお勧めします。

この性癖が苦手な人には、強烈な吐き気を催す可能性があります。十二分に注意してください。

それを気にしない勇者は、そのまま下へ。

そんなこんなで十数日すぎた。

これといった進展はなく、まあ、相手が相手だから進展も何もないんだろうけど。

喧嘩するわけでもなく、激しく恋しく恋しくともなく。

いたつて普通の恋人生活を送っていた。

そんなある日。

学校から家に帰つてみると、机の上にアレな本が出でていた。

誰だ、オカンみたいな事をする奴は……って、え……。

なぜ見つかったし！

ベッドの下は危ないと思つて、クローゼットの隠し棚にしまっておいたのに！

「コンちゃん！？ リンちゃん！？」

何も持つてないのか、姿が確認できない。

居間にいないとなると、残るは寝室だけ。

扉を思い切り開けて、周囲を見渡しておかしな箇所がないか確認する。

一歩踏み出すると、何かに躓いて、床と顔の距離が一気に縮まる。

床にひれ伏した俺の背中に、何か重たい痛みが走る。

それも一回ではなく断続的に。

ようやくそれが途切れたところで、姿勢を直す。

「リ、リンちゃん…？ それ、人を殴る物じゃないよ…？」

手に持っていたのは、アイロン。

それがまた上に浮いていき、俺の腹めがけて…。

『「いや、 じつじつのがお好きなのかと思つて…』

机に置かれていた本が開かれる。

お察しの通り、男性が女性に翻弄られている本。

この本の内容を、リンちゃんが実行してしまったわけだ。

「すいません…。俺が悪かつたです…」

またも俺に全責任がある。

しかし、なぜ見つかった。リンちゃんの存在に気付いてから出
してないはず……。

「何でこの本の場所を……。知つてたの……？」

: はい

考えられる要因は一つ。

存在に気付く前に、その本を出したことは何度もある。お世話になりました……ってそういう訳じゃなくて。

その時からリンちゃんがいて、俺が気が付いてなかつた。

そういうことになる。

もうお嬢に行けない……。

まあでも…見られてたと思うとそれはそれで…。

それにやつきてのうだつて、そんなんにイヤじや…。何言つてゐんだ俺

は。

『気持ち…良かつたんですか?』

…。嘘を言つべきか、素直に答えるべきか。

もつとやつてくれ! とは言わがに言えないし…。

誰か、このドミを救つてくれ…。俺は死んでらいい…?

幽靈責め…。変なジャンルに田原めそつだ…。

「気持ち…良かつた…です…」

素直な俺に…乾杯…!

明かりは夜明けまで消える」となく、男の悦びの声が響いたといないとか。

朝。

不眠不休。喉不調。テンション有頂天…だった。

踏まれる」とは出来なかつたが、道具を使って責められ続けた。

包丁の背で体をなぞられるのにはゾクゾクした。

声による会話は出来なかつたが、リンちゃんの書く声が俺の何かを加速させた。

動くと刺さつてしましますよ。

こんな文、最高だつた。

そして今。

本来は学校なのだが…行けるわけないだろ…。

『大丈夫ですか…?』

これが大丈夫な状態に見えるのなら、病院に行つた方がいいだろう。

「だ、大丈夫…だけど、今日は休むよ…」

一眠りしよう…。体が持たない…。

田を覚ますと、辺りは暗かつた。

下はパンツのみ。上半身裸。

「こんな姿を誰かに見られてたら、もつ生きていけないな。

「コンちゃん? ビー?」

「クルリと見渡すと、包一がこいつにさつてくのではないか。

「ちょー もう終わったからー 続きなー、なー!」

「ううううと、それは引き返してこま、今度は紙がやつてくれる。

『今、晩御飯を作つていたんですけど…』

…あら、やつだったの…。

べ、別に続きを望んでいたわけじゃない!

リンちゃんこの料理もかなり上達してきて、下手なフタミレスより
はウマ一。

とはいへ、13歳の少女。やつ大したもののは作れない。

しかしそれで十分。むしろ年相応といった感じで、俺には嬉しい。

「ねえリンちゃん、一緒に風呂入らない?」

欲望丸出し。それでこそ俺だ。

『え……その……そんな……』

あつと赤面してただらづ。ああ……こ……。妄想するのは自由だからな。

「リンちゃんが嫌なら無理ことは言わなこよ。でも、入ってくれたら嬉しいなあつて」

さすが俺！ 汚い！

リンちゃんの優しさに付け込んだ、嫌らしい一言。

俺を止める」とは、あんまりできなこ！

『でも……』

「つうか、いいんだ。無茶言つて」あんね……。俺となんて……汚いよね

自嘲的な言い方。さあ、やがてやがてやがて……

『汚いなんて思つてませんよ』

「じやあ……」

タオルと俺の着替えが宙に浮いて、風呂場へと飛んでいく。

俺の中で何かが崩れ去つていった。

幽霊責め（後書き）

最初はそんな気なかつたのに、途中から妄想力が爆発した。

幽霊責めって新ジャンルになるかな？

もちろん次はお風呂。

過去（前書き）

お風呂も…あるよ？

一部…というか半分は友人が書いています。

待ちに待つたお風呂の時間。

妄想はいつの時代でも自由なのである。

服を脱ぎ捨て、しかし、さすがに恥ずかしいので前はタオルで隠しておぐ。

リンちゃんにもタオルを持たせてあるので、ビリレーヌのかすべにわかる。

幽霊も服を着ているのだらうか？

着てたら服が浮いてるからわかるわけで、見えないってことは…常に裸！？

「リ、リンちゃんって…いつも服着てるの…」

さすがに、風呂場まで紙は持つてこれない。

その代りに、曇ったガラスに文字が出現する。

『着てゐに決まつてゐじやないですか。…えつち

俺の如意棒をヒートアップさせる氣かい？

風皿終了。

何にも起いらなかつた。

俺の妄想力が、なぜか発動しなかつた。

そうこつわけで、お風皿終了。パジャマに着替えて、寝る支度をする。

「一緒に寝よ」ひくんちゃん

せめてもの甘え。しかし断るひくんちゃん。

俺の甘えを受け取つてくれないのか？

聞きたいが聞けない。

まるで金縛りにでもあつたかのよつて、体の至る所が動かない。

どうしたものか…。

神は今、私めに試練を『えておられる。

だから俺は「リンドヤン」と取りあえず一言、声に出す…。

しかし、状況は変わらず金縛りのまゝ。

神は…こや、コンサルタント、俺に向をしてもらいたいんだうづか？

せうやつひ、試練の内容を尋ねてみる。

そして出た答えが…。『俺に男になれ…』

俺は恐る恐る「嘘してやる」口ひ寄せたのだ。

すると次第に金縛りは解け、そして自由に動けるようになる。

触れることはできなくとも、感じるのはできる。

次の日の朝である。

俺たちひよの朝口が昇る時間まで話をしていた。

思い出話から、いらぬ話まで…。

俺は今じで知ったことがある。

リンちゃんが死んだ話について…である。なぜリンちゃんが死ぬ
破壊になつたのか。

昔の話である。リンちゃんには兄がいた。

その兄はいじめられていた。

涙をいつも出でていたあの頃。時は小学時代まで遡る。

いつも靴に悪戯は当たり前、そして椅子に糊。

漫画でしか見たことがない奴がいるだらう。

しかし、兄の場合は現実にある。そして、リンちゃんの場合も…。

『蛙の子は蛙』

それは兄妹とて同じ。いじめられっ子の妹はいじめられっ子である。

好き嫌いなど関係ない。ただ何となくいじめるのである。

そのいじめが原因で学校に行かなくなつたリンちゃん。

それを気遣つ事にのみ、リンちゃんのお兄ちゃんの衰弱死。

さらにその負の連鎖は、兄の彼女の逆恨みにまで発展する。

なにを大げさにというかもしない。しかし、時として世界は不条理である。

逆恨みの念を持った彼女は、リンちゃんの家に押しかける。

そこで、彼氏を死なせる原因を作つた妹を殺した。

現実にハッピーHondなんでもない、ほとんど存在しない。

しかし、それが世の中といつものである。

俺はこの話を聞いて、一層リンちゃんの事を愛おうとした。

その日の夜。

俺はもう一度、リンちゃんをお風呂に誘つた。

やましい気持ちはない。

ただ純粋にリンちゃんと一緒にいる時間を長く作りたかった。

死んだ兄の代わりになろうと、心のどこかで思つていたのかもしれない。

風呂に入つても、気まずい空気が漂い続ける。

なんとか換気しようと必死になるが、どんな言葉を投げかけていいか見当もつかない。

言って良かったのか悪かったのか。

コンちゃんの過去を聞いた時から、これが頭から離れなかつた。

「沙都子と歴史みたいだね」

妹を思いやる兄。いじめられた兄妹。そのために消える兄。

被りすぎていた。

たぶん言つてはいけなかつたと思つたが、俺の心は少しだけスッキリした。

風呂から上がれば、何をするわけでもなく。

しかし、重い空気は継続していた。

こつも通りに振る舞つてこつもつでも、どこかで憐れんでしまひ。

けつめく俺にほゞじよつもできないのを。

早めのおやすみを言ひ、視界を閉じた。

辺りはまだ暗かった。

顔を叩かれるような感覚に起しそれた。

「リンドちゃん勘弁してよ…。朝から学校なんだから…」

枕元に置いてあるメモ帳を見ると、眠気が吹き飛ぶような内容だった。

『一緒に…寝てください…』

「ここにリンドちゃんからの甘い誘惑が訪れた。

場所を空け、布団をめくつてあげる。

すると、急に爆音が…。

「…やうこいつことね」

朝。カーテンから差し込む光は眩しく、目覚ましは鳴り響く。

じうせんなどだりひだり思つた…。

今日の名前。夢オチとは、非常に虚しこものである。

ん？　この時計…おかしくないか？

長い針さんは55分を指している。短い針さんは8を指していた。
あー…やつこいつ…。

朝飯も食べず、寝起きダッシュ。

リンちゃんには、簡単に説明して学校へと向かった。

『酔じや…ないですよ。…一緒にいたかったから…』

過去（後書き）

もつネタが死んでしまった（笑）

ラストは3パターン考えているので、全部書きます。
つまり、最低でもあと3つ書きます。

追記

「おこ、ちゅうと意味わからねえぞ。ちやんと書かよ」との描きを受けたので、加筆しました。
作者のやる気のなさの問題です。すみませんでした。

幸福（前書き）

ハッピーハンド。

友人に頼んで書きあげてもらいました。感謝！

幸福

学校帰りに、あるものを買って帰る。

その名も、ネコ耳カチューシャ！

べ、別に俺の趣味ってわけじゃないからな！

これがあれば、リンちゃんの居場所がすぐにわかるってことだ！

だから決して俺の趣味なんかじゃない！

と、会計の時にブツブツ言っていた。

たぶん周りには聞こえてない。そう思いたい。

例の物が入った袋を持ちながら、街中を歩いて帰る。

リンちゃんのため、リンちゃんのため……。

自分を正当化しながら家へと辿り着いた。

「ただいま、リンちゃん！ プレゼントだよー！」

慌ただしく靴を脱いで、机の上に物が入った袋を置く。

それが宙に浮くと、中からあれが取りされる。

『なんですか…』『…』

「ネコ耳力チユーシャだよ」

何とか説得して、カチューシャを付けでもらえた。

想像とはひょりと違うが…。

ポルターガイストみたいな感じになってしまった。

ま、どうでもいいや。

そんなこんなで、みづやく妄想の世界に浸れる。

とは言つたものの…暇でじょひがない…。

妄想？ ふざけんな。

「コレンちちゅんは何がしたい？」

『私は、一緒に寝てほしいです』

震える声で、そつと囁く。

「やうか…」

俺は深く聞かないようにして、傍でリンちゃんを感じないようにして元気でほしいうた。

たぶん理由なんてないんだ。ただ、傍にいてほしい。

それだけのことなんだろう。

俺はそのままに言い聞かせた。

つらいのは、理由を聞けない俺なんかじゃない…。

成仏できないうぼどの過去を持つ、リンちゃんの方がつらいんだ…。

俺はやう理解した。

しばりべして田を覚ますと、なんだか台所の方から音が聞こえてきた…。

ガシャン・ガシャン…。

いつもと変わらない様子で、リンちゃんは料理をしていた。

今日のメニューはオムレツである。

卵を上手にひっくり返すリンちゃん。

前の時より、格段に上手になつていいくリンちゃん。

もはや、俺とは天と地の差。いや、太陽と冥王星くらいの差がついてしまつた。

それでも、リンちゃんの作る料理が食べれるのだから、大して気にしないと言えば気にしてはいけない。

リンちゃん手作りのお弁当を俺は学校へ向かつた。

いや、向かねーと思つた。

しかしそこには、こつもと違つ状況が一つあつた。

リンちゃんが付いて来ている。

なぜ付いて来ているのだろうか?

しかし、そんなこと直接本人から聞けない。

セヒヂウしたものだらうか?

俺はとぼとぼと歩いてそのことを考えることにした。

しかし、まともな答えが出る前に、学校についてしまった。

一限の数学。

俺は、理系という概念が間まつたくない男であり、今田もこの前もそのまた前もさっぱりわからずじまいのままで現在進行中である。

一限の国語。

確かに俺には理系の概念などない。

かつと書いて、国語ができるわけでもない……。

少し文章が読め、普通よりは漢字が読めるってなだけだった。

三限の英語

もう一回までこれば書つまでもないと想つが、あえて書いておこう。

俺は日本人である。だから外国語なんていらない。

それが俺の答えだった。

四限の体育。

腹が減つては戦はできぬ。

そんなこんなで、疲れ果て……。

やつとの思いで飯にありつぐ。

クラスの注目である愛妻弁当。

今まで買い弁や買い弁や買い弁だった俺の飯が、何か不器用ながらもしつかり作つてある弁当に変われば、「怪しい」つと思わない人間がいるだろつか?

いや、いるはずがない。

だからこそクラスの注目が俺の弁当に集まるわけで……。

俺に「その弁当は誰が作つているんだ?」つとの質問が殺到する。

俺はその戦いを気合で乗り切り、リンちゃんを屋上に連れ出した。

「コンちゃんのお弁当のおかげで、クラス中大騒ぎだつたね……」

正直、あれが毎回続くとなると、それはもう大変なことに……。

けれど……。

「これからも作ってくれよな

これは今俺が発するひとのできる精一杯の言葉だった。

その返事に、屋上のビームからか集まってきた砂が動いた。

『了解です』

そんな言葉が聞こえるような気がする。

これからもリンちゃんの傍にいることができる。

お兄ちゃんにはなれないが、お兄ちゃんの代わりとしてなり……。

俺はそんなことを思いながら、「教室に帰るつか?」と声をかけた。

階段を下り教室に入りかけた俺の腕を、誰かがグイッと引っ張つた。

それは『幽霊の』リンちゃんが最後に取った行動であり、『それなら』を意味する行動だった。

俺は気持ちの整理をつけるのに少しだけ… 2週間ほどかかった。
もう今は『幽霊の』リンちゃんがいない事が当たり前の生活にな
ってしまった。

まさか、幽霊のリンちゃんが肉体を持てるなんて…。

悲しくはない。寂しくもない。

このいわく付き物件に、実在するリンちゃんと2人で生活できる
のだから。

俺は、夏鈴との気持ちを抱きながら前に進むことを決意した。

幸福（後書き）

補足。

消えたのは『幽霊の』リンちゃん。

夏鈴といつのは、肉体を得たリンちゃんのこと。

学校の屋上で、愛の力によりリンちゃんは肉体をもつった。

夏鈴=リンちゃん

そういうことで解釈して欲しいです。

次はバッヂエンドを載せます。

こわべや物件（前書き）

バジドHエンジニアージョンです

いわくわき物件

今日はコソチヤんにプレゼントを買つてあげようかと思つてゐる。

そんな訳で、俺は今その店屋にいる。

これならこつでもコソチヤんの姿を見れるつてわけだ。

俺天才！

さて、ネコ耳カチューシャも買つたし、帰りますか。

急いで家へと帰る。

「コソチヤん、ただこま。プレゼント買つてきたよ」

「反応はない。まあ、反応も何も声は聞こえないんだからな。

とつあえず覗つてきた物を机に置き、袋から出すよつと書つてみる。

がしかし、やはり反応はない。

「コソチヤん…？ か、かくれんぼのつもりかい？」

ある程度、わかつてはいた…。でもそれを認めるわけにはいかなかつた。

台所、風呂場、寝室。家中の中全部探した。

家から出れないリンちゃんが、外にいるわけがない。

ビームビームに行つたんだよ…。出でちゃへれよー。

血眼になつて探したかった。でもビームを探せつてこつんだよ。

足の力が一度に無くなり、その場に倒れこむ。

そのまましびらへ動けなかつた。気が付けば、外は暗くなつていて、た。

「戻つて来てくれよ…リンちゃん…」

呼んでも戻つてこないことはわかっていた。

でも、呼ばずにはいられなかつた。

夜も明け、空は明るさを取り戻していた。

足に力は入らないはずなのに、俺は外を歩いていた。

行く当ではない。

リンちゃんの気配を感じたかったのかもしれない。

交番の前を通りた時、警官に呼び止められた。

ヤク中の人とでも間違われたのだろう。

そんなに俺は死んだ顔をしているのか。そんなに俺は……。

事情を言つても信じてくれるわけがないので、適当な嘘をついた。

すると警官は、家に帰れと言つ。

……リンドヤーんのいない家に帰つたって……。

言われるがまま、俺は家へと歩を進めた。

静まり返った家の中。

振り向けば、そこには紙切れが浮かんでいるよう。

ふと見た下駄箱。

見慣れたメモ帳が置いてあった。

そこには、たつた一言。

『おわかれのじかんです』

認めたくなかった。認める」となんて出来なかつた。

田の前が真つ暗になつたのは、これが初めてだつた。

急に視野が狭まつたと思つと、意識まで持つて行かれた。

寝すぎると、リンちゃんが起こしてくれる。

そう、甘い考えを持つていた。

寝て起きれば、リンちゃんがいる。

そんな甘い現実を望んでいた。

ハッピーホンドなんて存在しない。

現実はいつだって冷酷だから。

むしろ、今までがおかしかつたのかもしれない。

幽霊との生活なんて。どう考えたつておかしかつた。

でも、それは現実だつた。その現実が甘すぎたんだ。

これで普通の生活に戻れる。一番幸せなことじやないか。

おいしい手料理もない。楽しい会話もない。

「冗談を言つて、困らせて笑いあつ」ともない。

よつやく……現実に戻れたんだ……。

あれから2年が過ぎた。

あの時のことは、今でもしっかりと覚えている。

同じ年の彼女もできて、不満のない生活を送っていた。

偶然か必然か。それとも、あの子の仕業なのか。

彼女の名前は『かじん夏鈴』

元気ハツラツ。いつも周りを明るく照らしているような存在。

「コンちゃん、今日はどこ行く?」

もううん、彼女のことは『コンちゃん』と呼ばせてもらひでこる。

彼女がいなかつたら、俺はきっと立ち直れなかつただろう。

「私、あなたの家に行きたい！」

…俺の家か。ま、いいだろ。掃除はしないから、驚くだろ。な。悪い意味で。

玄関を開けると、あの時と変わらないまま。

下駄箱の上のメモ帳は、一番上の部分だけ破られ、真っ白の状態。

あの子が使つていたシャーペンも、机の上に置いてある。

心の中で、いつか戻つて来るんじゃないかと思つていた。

戻つてきたら、三人で生活しようと思つて。

「えへへー。おじやましまーす」

ちなみに、彼女を俺の家に呼ぶのは初めて。

今までには、何かと理由を付けて断つてきた。そんなに長く付合つてゐわけでもないし。

それに、あの子の「ことわざ」ではない。

どうせ信じてはくれないだろ」と、一人で決めてかかっていた。

しかし今日、踏ん切りがついた。

あの子と生活していたこの場所で、打ち明けたりと申す。

彼女を居間へと案内し、机にお茶を出す。

そしてつこに話を……。

「あれ? 」Jのシャーペン、見覚えがあるよ? 「

…? いやこやまわか。」Jのシャーペンは、ビルで売っている
ものだし。

見覚えがあるのも当然だわ。

「それに、初めて来たとは思えないよ? な…

…いやいや…嘘でしょ? 、コンちゃんの訳がない…。

だつてコンちゃんはあの時…。

「コンちゃん…? 」

声は無意識に出でていた。

「何? 」

「あ、いや……。やつはじやなくて……。順を追つて話すよ」

幽霊少女との生活、幽霊少女との別れ。全部話した。

最初は信じてくれなかつたが、俺のあまりの真剣さに『気付いての
か、茶化さずに聞いてくれた。

もしかしたら、彼女はリンちゃんの生まれ変わりじゃないかと、
話していくうちに思えてきた。

それなら一層、彼女を大事にしようとした。

もつ一度と、コンちゃんを手放さないために。

そこで俺の意識は、よつやく戻ってきた。

玄関の段差を枕にするよりは寝ていたらしく。

田の前には下駄箱が大きく見えた。辺りは暗かった。

自分でも言つたじゃないか…。現実は冷酷だつて…。

立ち上がる気力もなく、再び田を閉じた。

もうこいつそのこと死んでしまおうか。

夢の世界で生きられるなら、こんな冷たい現実の世界で生きるよりマシなのではないか。

運が良ければリンちゃんに会えるかもしれない。

俺は台所へと足を動かした。

リンちゃんがいつも使っていた包丁を手に取った。

「リンちゃん…会いたいよ」

その家は再び『いわく付き物件』となつた。

いわく付き物件（後書き）

補足… いらない？

まあ、最後は主人公がアレしたところで。

次はヤンデレエンドを書く予定です。
ただし予定に変更は付き物です。

少女は空に飛び、男性もまた飛んだ（前書き）

ヤノハレハナ...を書いていたはずなの...。

どうして...なったー。

少女は空に飛び、男性もまた飛んだ

今日はリンちゃんにお土産。

その名も「リボン付きカチューシャ」

鏡 リンがつけてるのと同じような物。

急いで家に帰ろうとして人にぶつかったが、無視して帰った。

今の俺は誰にも止められないのを…

家に到着。

すぐに置ってきたものを机に置き、リンちゃんを呼ぶ。

『えっと…』

どうやら喜んでくれているようだ。

せっそくそれを着けさせ、嫌がつて様な気もするが、かわいがつたので気にしない。

無理言つて、そのままの姿で晩御飯を作らせる。

ネコ耳+エプロン。姿は見えないけれど、十分妄想で補える。

食材を切る音がリズム良く聞こえ、眠気を加速させる。

「エンジンを上げ過ぎたのだろう。次第にまぶたが重くなつてくれる。

俺「リンちゃん、『飯出来たら起こしてね』

晩飯が出来るまで一眠り。すぐに意識が持つていかれ。

「何は…学校…？ なんで俺は学校にいるんだ？

周りは真っ暗なのに、赤い月があたりを照らしている。

人つ子一人いない。歪んだ世界で地面にうずくまつてゐる俺。

動こうと思つても、金縛りのよくなつていて動けない。

だんだんと気温が上がり、汗が滲み出でくる。

世界は赤一色になり、地面が溶けていく。

ゆづくづく落としていくと、温度がさりとて上がる。それにしたがつて、押しつぶされるよつたな威圧感。

ハツと田が覚める。

そこは確かに俺の家で、至って変わらない田。至って変わら
な。

田の前に広がるのは、湯気を立てる美味しい料理と、いくつも
の火のついた蠟燭。

起き上がりついしたが、両手両足を縛られ、いつも通りには起き
上がれない。

若干苦労しながら起き上がると、包丁がこちらに向かって漂つて
くる。

俺「リンちゃん…? これは…どういふとかな…?」

包丁はなおも漂い、俺の近くになつても速度は変わらない。

身の危険を感じ、すぐ元伏せる。

俺の頭上で包丁が止まる。

次は紙が俺の頭上で止まる。

『動かないでくだけ』

俺「いや……動かないでくだけ……動けないんだけど……」

『口答えもしないでくだけ』

俺「えつ？」

包丁が下に落ちてきて、皿と鼻の先で止まる。

『うやうやしきんちゃんは本気らしい。でもなんで……こんな風に……。俺、何かした？』

考へても原因はわからず、むしゃくしゃしてへる。

俺「うめんリンちゃん。俺、何か……」

言ふ終わらない内に、口に温かい物がつづこまれる。

これは……晩飯？

皿の前で包丁と箸が浮かんでいる。

もう訳が分からぬ。つまりあれか。『テレカ。

…そりかー！ 今日はシンディレプレイなのか！

俺「ビックリしたなあ、もう。そういう事なら先に言つてくれれば
」

またも包丁がやつてくる。

しかし今度は、腕を軽く擦つていった。

赤い線が入り、血が浮かんでくる。

これは…マジなの…？ そういうプレイじゃないの…？

食べ終わると、椅子に座るよつて言われる。

椅子と俺の体が、ガムテープでグルグルと固められる。

足と腕も同様に固められる。

そしていつも通り、紙が浮かんでくる。

『私の物なんです』

支配欲かよ…。この状況はマズイ…やられる…。

包丁の背で首筋を撫でられる。

冷たい感覚が、俺の中を走り抜ける。

『逃がしませんよ……』

朝日が昇り、窓の隙間から太陽の光が射しこんでくる。

今もなお包丁は田の前を浮遊している。

俺の体は刃向う度に傷つけられ、全身にみみず腫れや出血を起こしている。

一睡も許されず、椅子の下にまたぐさんの紙切れが落ちている。

『朝』はん、作りますね。私の愛を余すことなく受け取ってください

台所に飛んで行った包丁は、何秒か毎にこちらを向く。

しづめりへると、2つの目がじゅうぶん漂つて来る。

『わあ、食べてください』

口を開ける元気さえない。

それを見かねたのか、皿に乗った料理がスプーンでちょいビープ、俺の口の中へと乱暴に突っ込まれた。

突然入り込んだ物を吐き出ると、すぐに刃物が飛んでくる。

足に一本の赤いラインが刻まれる。

痛みに呻く元気もなく、声にならない音が口から漏れる。

何度もそれは繰り返され、口の周りは涎や食べ物で汚れ、閉じる口はしなくなっていた。

そのうちに意識も薄れ、目を開く力さえ無くなつた。

息をするだけで精一杯。

最後に見た光景は、俺の腕の骨が見えるシーンだった。

痛みはない。

視界を失つた今、リンちゃんと会話する手段が断たれた。

それでも紙に文字を書く音が聞き取れた。

数日後。

とある家で、椅子に縛られた男性の死体が見つかった。

男性は首から上が刃物のよぎなもので切り取られていた。

脚には複数の傷。左腕は骨がむき出しの状態。

椅子の下には大量の紙。

男性の頭は、未だ見つかっていない。

このニュースは世間に広く知れ渡った。

そんな世の中をはるか上空から見てい、1人の少女と1つの頭があつた。

少女は空に飛び、男性もまた飛んだ（後書き）

書いた本人も、どこを間違えたのかわからない。
何でこうなった…。

ヤンデレはヤンデレ視点で書くのは楽だけど、ヤンデレの被害者視
点で書くのは難しい。
今回で身に染みた。

これからは、ヤンデレ視点で書いていこう。
例えばリンちゃん視点とか…。
いや、何でもない。

ちなみにタイトルは、GOTHIC風味にしたかっただけで、深い
意味はないです。

何気ない日常（前書き）

特別企画というわけで、特別バージョンです。
ただし、オチは無いです。
何が特別か知りたい方は、後書きにて。

何気ない日常

今日はリンちゃんへのプレゼント。

少ない金で買ったネコ耳カチューシャ。

妄想を楽しむため…じゃなくて、リンちゃんを喜ばせるため。

天にも昇るような足取りで、リンちゃんが待つ自宅へと帰る。

周りから見たら変人なのだろうが、今はそんなこと関係ない。

家に着いて、にやけ顔でドアを開ける。

乱雑に靴を脱いで、慌ただしく居間へと向かう。

すると一枚の紙が浮かんでくる。

『どうしたんですか？ そんなに慌ただしく』

「コンちゃんにプレゼントだよー」

リンちゃんの言葉を無視して、買ったネコ耳カチューシャを机に置く。

満面の笑みの俺。動くシャーペン。

『「これは……？」

「プレゼント… つけてみてよ」

わづくつとそれは宙に浮き、ある一定の高さで止まる。

それはつまり、装着してくれた。

「とってもかわいいよ、リンちゃん」

わづくつ妄想。即脳内補完。

わづくと恥ずかしがつて顔を赤くしてるんだろう。

そういうコンちゃんも、たまらなくかわいい。

すっかり顔の筋肉が緩んでいるところに、再び紙が飛んでくる。

『「れつけながら」、飯の準備するんですか…？』

その発想はなかつた！

「ぜひともお願ひしたい」

ネコ耳は台所へと飛んでいき、包丁が浮かぶ。

「」から見ていると、最高の光景が映る。

少女の料理姿。それもネコ耳。

妄想には十分すぎる姿。

俺もゆっくりと立ち上がると、台所へと向かう。

ネコ耳の後ろに立つて、眺める。

リンちゃんがそれに気が付いたのだろう、包丁が二つ同時に回る。

一瞬、背筋がゾクッとしたが、それは快感へと変換される。

特に変わったことは無く、晩御飯の完成。

『やつあざわさだむすびたんですか？』

「いや、ちょっとね。リンちゃんを近づけて見つめたいなって

今日は俺が主導権を得る。

リンちゃんの顔を赤くさせてこべ。

食事を食べ終わると、例のネコ耳が俺の近くへと擦り寄つてくる。

『今日は……ズルいですよ……』

カチューシャが俺の腕に触れそつなくひこに寄つてくる。

せつと手を伸ばし、頭でおひつじの撫であがる。

「玲ちゃんの方から戻ってきてるなんて、とは思つたが、素直に受け取つておへ。

本格的に猫属性でも加わつたのか？

そんな『レーレー』状態の玲ちゃんを撫でながら、時間は過ぎていった。

お風呂こも入り、パジャマに着替える。

風呂でも力チュー・シャが浮いていたよつな気がしないでもない。

まあ、やじらぬよく覚えてないです、はい。

布団に潜りうとしたといひで、玲ちゃんを呼んでみる。

すぐに紙は飛んでくる。

『手びましたか？』

「ああ、呼んだとも。これからある、あることのためこね。

「コンちゃん、寝なぐても平気なんだよね？」

『手びますね？』

よしよし、まだ気が付いてない。

「じゃあね、今日また起きてよ！」

俺の考え方。

それは、リンちゃんとのオールナイトファイバー。

寝ずに、ずっと起きて、あんな事やこんな事やそんな事を…。

『でも、明日は学校なんじや…』

「大丈夫、休むからー。」

リンちゃんと一緒にいられるなり、学校なんて休む。

その後も俺の心配してくれたが、やつやつと話していくうちに朝はやってきた。

眠気は驚くほどに無く、むしろ充実感でいっぱいだった。

何を話したわけでもない。

からかってたり、リンちゃんをちょいと困らせてみたり。

逆に困られたり。

いつもとは違ったリンちゃんの一面を見る」とが出来たような気がした。

今ネ「耳さんは、台所で朝飯の準備中。

邪魔にならないよう、俺は待機。

幽靈がいることは変わっているが、俺にはそれが普通。

リンちゃんがいる。だからこの生活がある。

一般常識から少し外れた生活。

誰にも信じてはもらえないが、それでもいい。

2人で楽しく、笑いあって暮らしている。

台所から俺を呼ぶ、1人の少女の声がした。

何気ない日常（後書き）

ちょっと短かつたか？ まあ、いいや。

特別企画。

それは、作者年齢1才。今日が作者としての誕生日です。小説を上げ始めて1年。これからもがんばっていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4233s/>

いわく付き物件の幽霊

2011年11月13日03時46分発行